

【朝鮮の写真アルバム】

須永文庫には「朝鮮の写真アルバム」という資料があります。

37枚の写真が台紙に張られ、折り帖仕立てになっています。目録の出版年の欄には「明治」とありますが、誰がいつどこで何を撮影したものか不明でした。

鶏卵紙に印画されているようで、19世紀後半の撮影とみられますが、画質が劣化しているため、細部を読み取るのは困難です。それでも、よく目を凝らすと、少しずつ何を写したのかが分かってきました。

【円覚寺址十層石塔】



写真1

まず、写真1は『朝鮮日報』2022年12月16日付に同じ写真が掲載され、

「円覚寺址十層石塔」を写したものと分かりました。記事は韓国初の写真専門美術館である「ハンミ写真美術館」が「ミュージアムハンミ」と館名を変更し、再出発すると伝えるもので、掲載写真について、「黄鋳が1880年代に撮った円

覚寺十層石塔風景」(原文はハングル)としています。

朴柱碩『韓国写真史』(ムンハク・トンネ、2021)も同じ写真を載せ、キャプションに「10.0×13.9cm、アルブミンプリント、1880年代、ハンミ写真美術館所蔵」とあります。アルブミンプリントは鶏卵紙に印画したものです。

黄鍔については九回目にも少し触れましたが、朝鮮における写真術導入の先駆者で、江原道や慶尚南道の観察使を務めるなどしました。須永と親しく、官界を引退後は日本で画家として活動し、没後、須永の菩提寺である佐野市の妙顕寺に葬られました。

「円覚寺址十層石塔」は、ホン・デヒョン『韓国の建築文化財 ソウル編』(技文堂、2001)や国家遺産庁HPによると、ソウルのタプコル公園のところにあった円覚寺の石塔です。朝鮮時代初期の15世紀に建てられ、大理石製で高さ12mです。塔の表面に飾られた仏像彫刻などが高く評価され、韓国で2番目の国宝に指定されました。

しかし、写真に写っている石塔はそれよりも低く、上の3層が外されていました。

『朝鮮古蹟図譜13巻』(朝鮮総督府、1933)にその外された3層の写真が載せられています。今はもとの姿に復元されています。ただし、本来は13層だったという説もあります。

【迎恩門ほか】



写真2

写真2は中国からの使者を迎えた「迎恩門」とみられます。開化期の1896年に取り壊されたので、それ以前の撮影だと分かります。跡地には「独立門」が建てられています。



写真3

写真3は景福宮の正門「光化門」です。



写真4

写真4はソウルを流れる清溪川の水位を測量した「水標橋」と思われます。



写真5

写真5は洋館が写っています。日本公使館に似ていますが、確定するには判断材料が足りません。

このほか、「恵化門」「監理衙門」など扁額から何の写真か分かるものもあります。

【先駆者の苦難】

ところで、崔仁辰『韓国写真史 1631—1945』という本が1999年にソウルの出版社ヌンピッから刊行されました。日本語訳が青弓社から犬伏雅一

監訳で2015年に出ています。それによると、黄鍊（同書では黄鐵と表記）は1890年頃に金剛山撮影のため遊覧の旅に出ました。このときに撮った写真は韓国内には残されておらず、佐野市郷土博物館にあるということです。また、黄鍊は肖像写真と家族写真、記念写真などを撮影する一方、王宮とソウル市内の要所の撮影に心血を注いだとあります。

ただ、こうした活動が国家機密の漏洩に当たるとして投獄されたり、甲申政変の時には写真館が群衆に破壊されたりといった苦難をなめたということです。

須永文庫の「朝鮮の写真アルバム」の写真は、黄鍊が撮影したものと思われます。

また、肖像画が中心のようですが韓国の国立現代美術館にも黄鍊の写真が大量にあるようで、須永文庫とミュージアムハンミ所蔵の写真とをあわせて照合していけば、より多くのことが分かるでしょう。さらに検討を続けたいと思います。

2025年3月25日 広沢有久

須永文庫資料研究室のアドレスは <https://sano-haku.com/sunaga-bunko/>